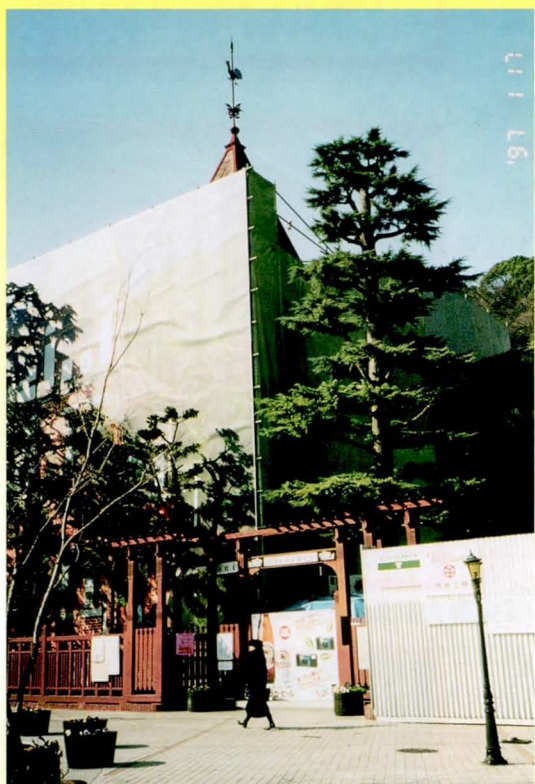


災害と文化財保存の歴史地理

～阪神・淡路大震災20年を越えて～



1995年1月17日、兵庫県南部地震によって東灘区湾岸の高速道路が大きく倒壊したのは、奇しくも現在の神戸大学海事科学部の目の前でした。そして2016年、阪神・淡路大震災から21年、東日本大震災から5年を迎えます。

阪神・淡路大震災以後の調査研究により、日本列島の太平洋側の海溝において、巨大地震が数百～数千年単位で繰り返し発生してきたのが分かってきました。けれども、それらの成果が十分周知される前に、2011年の東北地方太平洋沖地震が発生し、大規模な津波が沿岸を襲いました。地理学の教育・研究に携わる私たちは、今回の地震防災への反省を肝に銘じるべきと考えています。

地理学は防災にどのように関わっていくのか。神戸大学地理学教室では、地元神戸で起きた兵庫県南部地震に改めて学ぶという姿勢から、2015年度は“災害と文化財保存”をテーマに学習を進めてきました。

神戸大学で学ぶ学生たちも、阪神・淡路大震災を直接知らない世代が増えてきています。人間生活と災害の今後について思索する機会を通じて、震災をいかに受け継ぐか、という神戸固有の課題にも向き合っていきたいと考えております。

なお今回は海事博物館の協力により、神戸大学サテライト巡回展の一環として開催いたします。みなさまに、広くご覧頂ければ幸いです。



地理学からみた災害、および文化財

災害の履歴をさぐる

災害・災厄にかかわる地理的事象は、自然現象として発生する面と、私たちの生活等に被害を及ぼす面とがあります。1995年の兵庫県南部地震、近い将来起こるとされる南海地震と南海地震による津波も、自然地理的には数十年、数百年単位で起こる現象です。

これまで、古記録から地震の周期性が指摘されてきましたが、文字資料は過去2,000年ほどに限られます。考古学や地形、地質学の手法により、土地に記録された地震痕跡をたどって、過去の災害履歴を探る調査研究が、近年進められています。

平安時代の貞観地震は、宮城県仙台平野沖で発生し、大規模な津波被害をもたらしました。巨大海溝型地震として関係者から注目されましたが、成果の一般への周知や、行政の防災対策が進む前に、東北地方太平洋沖地震が発生した点が悔やまれます。2015年4月にネパールで起きた大地震を巡っても、歴史地震としての周期性が直前に学会で議論されたばかりでした。災害後に行われる調査は、防災、減災にいかにつなげるかが重要で、例えば普及の著しいGISの技術も、地理学的な応用の仕方が注視されます。

地震の予知が不可能な分、災害研究の社会化は、世界共通の課題です。ここでは歴史地理学の立場から、古代の貞観地震、近世の安政南海地震の事例をまとめました。最近の歴史災害研究の動向から、南海・東海地震が発生した際に、どう対応すればいいのか、考える材料を整理します。

貞観地震と津波被害

869(貞観11)年に宮城県沖で発生した地震は、大規模な津波を引き起こし、多賀城周辺などで多くの被害があったと伝えられています。

最近の調査で、M8クラスの巨大地震として、仙台平野一帯の津波到達範囲が明確となりました。震源域や被害想定域は、明治・昭和の三陸津波より、むしろ2011年の東北地方太平洋沖地震の津波に類似しており、あれだけの災害が歴史災害として繰り返し発生してきた点に注意されます。

安政地震と大坂を襲った津波

安政南海地震は1854(嘉永7)年、安政東海地震の翌日に連続して発生しました。四国沿岸はもちろん、大阪湾岸にも津波が押し寄せ、現在の難波駅付近まで遡上し、多くの船が押し流されました。

道頓堀川河口には、津波の教訓を記した石碑が建立され、大事に受け継がれています。神戸市内でも、神戸市役所4号館建設時に津波堆積物が発見され、宝永あるいは安政地震にともなう津波と推測されています。

災害と人間関係の地理学：阪神・淡路大震災の現場から

洪水や土砂崩れ、地震等々の自然現象が人間の居住域付近で発生すると、災害が起こります。都市型災害であった阪神・淡路大震災は、建造物の倒壊や火災、インフラの寸断がいたる所で生じ、市民生活に大きな影響を与えました。

全国から支援に駆けつけた数多くの人々の活動は、NPO法の整備に繋がり、1995年はNPO元年とも呼ばれています。神戸では現在も、多くのNPOが活動をしています。大半は地域に根差したローカルネットワークを活かし、住民生活を支えています。

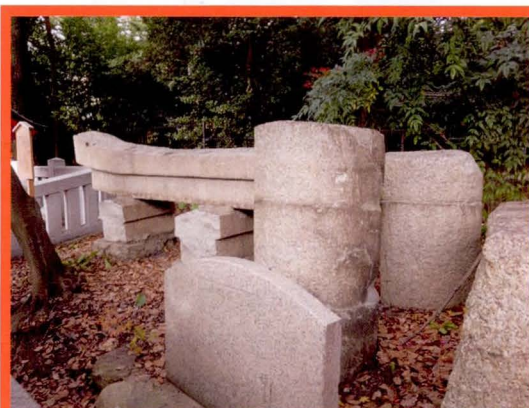
一方で、“復興災害”と呼ばれる現象が、神戸では未だに残っています。とくに避難生活に始まる地域コミュニティの維持、再生といった課題は、東日本大震災においても顕在化しています。防災において、地域のコミュニティの復興が注意されるようになったのは、阪神・淡路大震災のような大規模な災害が端緒と見られます。そこで災害と人間生活について、ボランティアとコミュニティを軸に読み解きました。1995年以来的の経験や反省を、今後の災害対策にどう活かしていけるか、災害列島に暮らす私たち自身のあり方が問われているのではないのでしょうか。



大正橋たもとの津波記念碑
「大地震両川口津浪記」は1855(安政2)年に、津波の教訓を伝えるために建てられました。



神戸市危機管理センター
江戸時代の津波痕跡の見つかった場所には、現在防災展示室が設けられています。



生田神社の折れ鳥居
安政南海地震によって、石造の鳥居が倒壊したと伝えられ、境内に一部が残されています。

コミュニティを巡る議論は、地域との関わり方にもつながります。例えば神戸大学人文科学研究科の地域連携センターでは、地域歴史資料の収集・保存・活用および継承の活動を、地域の市民・団体や行政と共に進めています。また神戸大学附属図書館の震災文庫は、震災に関するあらゆる資料を収集し、一般に提供してきました。

地域をつなぐ存在として、MLAK(ミュージアム、図書館、公文書館、公民館)等の役割は今後とも大きくなると考えられます。阪神・淡路大震災は地域における人・社会・文化の様相に改めて気づき、見直すきっかけとなった出来事でした。20年を越えてなお、1.17を振り返り、記憶し、伝える作業が引き続き重要と思われます。

ボランティア活動の原点

1995年以前にも、神戸ではいわゆるボランティア活動が行われています。阪神大水害では、六甲山南麓が大規模な土砂災害に襲われました。当時、戦時下にありながら、多くの一般市民が支援活動に携わっています。

コミュニティの維持と形成

阪神・淡路大震災後、孤独死が注目されました。仮設住宅や復興住宅では、多くの人びとが以前の地域的つながりから切り離され、入居者の精神的負担は、孤独死となって現れました。

ケミカルシューズの町としても知られる長田では、製造業等を支えてきた、多くの在日外国人の存在が、日本人にも改めて認識されてきました。同じ地域住民として、共生の仕方が模索されています。



神戸大学震災文庫

災害と文化財保存の歴史地理学

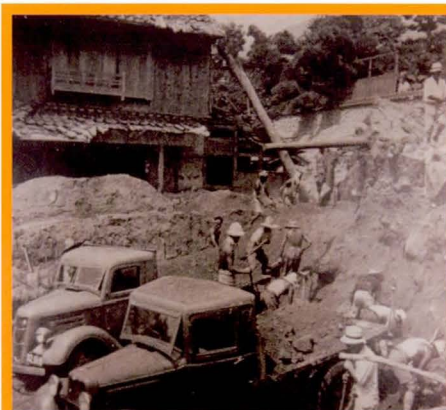
阪神・淡路大震災では、人間だけでなく、建造物、美術品や古文書といった文化財、より広くとらえれば、個人の持ち物や記念写真等々を含めた地域歴史資料も、数多く被災しました。

とは言え災害時には人命や生活再建が第一であり、これら文化財の救出はどうしても後回しになります。

災害時に人間と同様に不可避である、文化財の被害を最小限とするには、日常的に文化財の保存・活用をどう担保するかが重要です。文化資源、地域歴史資料などとも呼ばれる文化財は、一つ一つが大切に扱われるべきです。阪神・淡路大震災や東日本大震災では、被災した文化財が修理・復元され、復興の新たなシンボルとして、地域住民の精神的支柱となっている例もあり、文化財の普遍的な価値とその多面性を表しています。

日本で戦後、文化財保護法が制定されたきっかけは、法隆寺金堂壁画の火災による焼失でした。文化財の防災は以後、防火を中心に、各地で災害が起こるたびに、個別に対策が取られてきました。阪神・淡路大震災では、それら従来の文化財防災対策の欠点が浮き彫りとなり、行政や地域の横の連携、指定文化財以外の地域歴史資料の所在等の把握などが指摘されました。一番の課題は、局所的な防火対策が主体で、都市型災害あるいは自然災害全般に対する研究や対策が参照されてこなかった点と思われます。

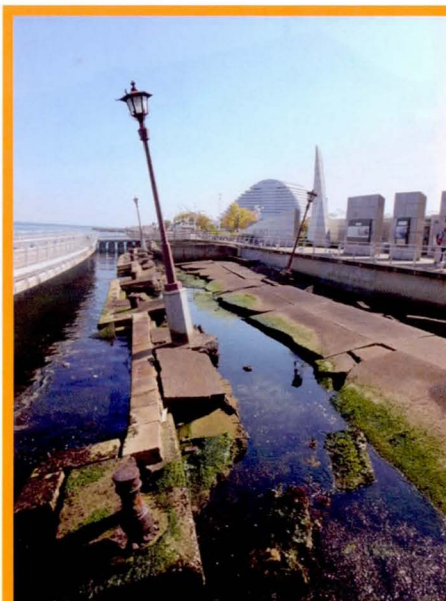
現在、災害分野と連携した、より統一的な文化財防災体制が、県・市レベルで取り組まれています。文化財防災学も提唱され、調査研究が行われるなど、資料保存において、防災が普段から心がける項目として重点化されています。ただ、この20年間で様変わりした情報環境への対応はまだ不十分な面があります。文化財の資料情報と防災情報をあわせたデータベースの構築、アーカイブ化、あるいはGISを活用した保存活用体制づくりは、現在の文化財保存の課題の一つです。



阪神大水害(1938年)の復旧作業
災害の復旧作業には、神戸商業大学(神戸大学の前身)の学生も従事していました。



シューズプラザ
靴のまちを代表する建物として、JR新長田駅北地区の復興時に設けられました。



神戸港震災メモリアルパーク
被災したメリケン波止場の岸壁の一部を、そのまま保存しています。

まちづくりと文化財保存

文化財防災の総合的な取り組みにおいて、鍵となるのは地域と市民です。地域振興を念頭に置いたまちづくりが、現在、各地で盛んに行われています。まちづくりでは地域を物語る存在として、しばしば文化財が取り上げられます。文化財を掘り起こして特徴を明らかにし、公開したり、学習会を始めとした各種ワークショップ、イベントで活用するのは、文化財の保存活用策の一つです。近年は文化財のもつ価値が多方面から注目され、特に地域的な特徴を表している文化財を、まちづくりの基軸とする例が増えています。

災害で被災した文化財は、救出、保存修理の過程で、地域にとってかけがえのないものとして、再認識されるケースがしばしばあります。改めて、震災を乗り越え、文化財を大切に守り伝えていく、地域の取り組みに学びたいと思います。阪神・淡路大震災を経験した神戸、東日本大震災にあった茨城の事例から、現在のまちづくりと文化財の関わりを見つめます。



旧居留地15番館

明治初期建設の、旧居留地を代表する近代建築。
震災で全壊しましたが、いち早く復元されました。

神戸旧居留地：「にぎわいと風格」ある景観の演出

神戸を代表するオフィス街は、文化財である近代建築物が多く残り、現在もオフィスビルやブランドショップとして使用されています。

旧居留地としての歴史を映した、にぎわいと風格ある景観が魅力ですが、実は保存より実用面を重視した、文化財の生産的活用を意図した地元関係者の取り組みが背景にあります。

新在家南地区のまちづくり：景観の取捨選択

灘五郷の歴史を引き継ぐ酒造りの町は、戦後、臨海工業地区として発達してきました。地震によってかつての風景は変貌しましたが、酒蔵のイメージを基礎として、新たなまちづくりが進められています。



酒蔵の道

沿岸にかつて立ち並んでいた酒蔵は減少していますが、散策路沿いに往時がしのべれます。

北野の異人館

かつて外国人が移り住んだ北野は、戦時中、外国人収容所も一時置かれていましたが、戦後は山手の住環境、あるいは近代建築が取り上げられ、町の保存活動が続けられてきました。

開港都市、神戸を代表する場所であり、震災の影響を受けつつも、異国情緒が感じられる観光地として注目されています。

真壁のひなまつりと住民主体のまちづくり

茨城県西部に位置する桜川市真壁地区では、2011年の地震で古い町並みが大きな被害を受け、復興に努めています。

地震前から文化財保護制度を活用して町並み保存に努め、ひなまつりが好評を博してきました。地域の地道な取り組みは、住民の自主的な活動で支えられてきました。



北野物語館

旧フロイドリープ邸は震災後に解体されましたが、2001年に現在地に復元されました。

六角堂の持つ文化財的価値：災害と文化財の再生

北茨城市にある六角堂は、岡倉天心が明治時代に建てた堂で、景観と建築物が調和した姿が評価されてきました。

2011年、津波で惜しくも流失しますが、市民や関係者の努力で復元され、文化財としての本来の価値に加え、震災復興のシンボルとして、新たな価値を獲得しています。

(右上) 六角堂等復興基金、真壁のひなまつりの案内

「災害と文化財保存の歴史地理学」企画展リーフレット

発行 2016年1月30日

編集 神戸大学人文科学研究科・文学部地理学教室(責任編集 菊地 真)

657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/geography/index.html>

「災害と文化財保存の歴史地理」展示目録

会期 2016. 2. 1～3. 28 会場：神戸大学海事博物館

災害と人間関係の地理学

	資料名	著者／発行者	発行年	備考
1	阪神・淡路大震災さよう21年 災害への備え なお途上	「神戸新聞」1月17日／神戸新聞社	2016	
2	若き船乗り住民100人救った	「神戸新聞」1月16日／神戸新聞社	2016	
3	未来につなぐ「震災の記憶」	「東京新聞」1月14日／中日新聞東京本社	2016	
4	ぼうさい甲子園 表彰式・発表会	ひょうご震災記念21世紀研究機構	2015	リーフレット
5	本から学ぶ防災	兵庫県立図書館	2016	リーフレット
6	忘れてはイケナイ1.17震災	神戸市立地域人材支援センター	2015	リーフレット
7	1.17のしるしーイマ/ココから考える	人と防災未来センター資料室	2015	リーフレット
8	野島断層北淡震災記念公園	野島断層北淡震災記念公園		リーフレット
9	災害に学ぶ 明治から現代へ	国立公文書館	2015	
10	大震災と報道展	日本新聞博物館	2003	
11	大地に刻まれた災害史	神戸市教育委員会	2014	
12	コミュニティ主導の災害復興と大学の役割	神戸大学震災復興支援プラットフォーム	2015	
13	震災1年後開局「FM わいわい」ネット放送移行へ	「神戸新聞」1月19日／神戸新聞社	2016	
14	震災文庫(阪神・淡路大震災関係資料文庫)	神戸大学附属図書館		リーフレット
15	地域の人々にとっての山垣遺跡	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	2006	
16	災害と歴史遺産―被災文化財等レスキュー活動の20年―	兵庫県立歴史博物館	2015	
17	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター		リーフレット

災害の履歴をさぐる

18	地震を知って明日に備える	SAN・SO・KEN／産業技術総合研究所 地質調査総合センター	2014	
19	平安の人々が見た巨大津波を再現するー西暦869年貞観津波	災害正展ほか(AFERC News)／産業技術総合研究所	2010	(複製複写)
20	Geological evidence of AD 869 Jogan tsunami	Yuki Sawai／地質調査総合センター	2015	
21	吉田東伍著「貞観11年陸奥府城の震動洪溢」	渡辺史生／阿賀野市立吉田東伍記念博物館	2011	(複製複写)
22	古地図が語る大災害	本渡章／創元社	2014	
23	地震を読む	(歴博)90号／国立歴史民俗博物館	1998	
24	大坂大津波図	「古地図が語る大災害」創元社、付図		(複製)
25	明治時代以降の主な被害地震	産業技術総合研究所	2006	
26	地質の目でみる地震災害の連鎖	地質標本館	2014	

まちづくりと文化財保存

27	北野町山本通に残されている伝統的建造物の分布図	(景観形成の基準と届出・許可申請手続き書)／神戸市住宅都市局・教育委員会	2012	パンフレット(複製)
28	桜川市真壁伝統的建造物群保存地区	桜川市教育委員会		パンフレット(複製)
29	酒寄健治・豊子写真集 日本の文化・真壁の雛祭り	酒寄健治、酒寄豊子／文芸社	2005	
30	和の風第十四章 真壁のひなまつり	桜川市観光協会	2016	リーフレット(複製)
31	真壁の町並み:伝統的建造物群保存対策調査報告書	桜川市教育委員会	2006	
32	蘇れ、六角堂	茨城大学広報誌「iUP」2011 vol.02	2011	
33	六角堂再建の軌跡 天心の魂、五浦の海にふたたび	茨城大学広報誌「iUP」2012 vol.03	2012	
34	天心・六角堂復興プロジェクト	茨城大学	2012	
35	六角堂再建の軌跡	茨城大学	2014	

閲覧用資料

36	歴史的町なみを活かした”語り”のあるまちづくり	(アカデミア)市町村アカデミー	2013	(複製)
37	地域とともにこれまでも、これから	茨城大学広報誌「iUP」2013 vol.04	2013	
38	災害の地理学	吉越昭久／文理閣	2014	
39	葺合・脇濱の歴史と長濱家文書	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	2013	
40	LINK Vol.7	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	2013	
41	LINK Vol.6	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	2014	
42	LINK Vol.7	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	2015	

43	地域歴史遺産保全活用ハンドブック 兵庫県版	神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター	2013	
44	迫る巨大地震 最悪のシナリオは何か	日経サイエンス 2012年2月号	2012	
45	地震・噴火・洪水—災害復興の3万年史	兵庫県立考古博物館	2015	
46	ひょうご 復興の街から	神戸市教育委員会	1997	
47	西暦869年貞観津波の復元と東北地方太平洋沖地震の教訓	岡村行信(シンセシオロジー)/産業技術総合研究所	2012	(複製)
48	ドキュメント災害史 1703-2003	国立歴史民俗博物館	2003	
49	中世の巨大地震	矢田俊文/吉川弘文館	2009	
50	地震と噴火の日本史	伊藤和明/岩波書店	2002	
51	兵庫県地震災害史 古地震から阪神・淡路大震災まで	寺脇弘光/神戸新聞総合出版センター	1999	
52	歴史から探る 21世紀の巨大地震	寒川旭/朝日新聞社	2013	

主要参考資料（展示資料以外を記載，順不同）

- 浅野瑞生 2015「阪神・淡路大震災の概要と文化財の被害」・上田咲季 2015「東日本大震災と阪神・淡路大震災：コミュニティ意識の変化」『展示会「歴史地震(貞観地震)に学ぶ津波の実態」資料集』
- 浦野正樹他 2008『復興コミュニティ論入門』弘文堂
- 岡田義光 2012『日本の地震地図 東日本大震災後版』東京書籍
- 小川稜人・松田有紗子 2015「神戸旧居留地に見る近代建造物遺産の生産的活用の実態」神戸大学 2015年度前期「文化財学」成果発表，神戸大学百年記念館
- 木村智史 2014「歴史的な町並みを活用し，魅力あるまちづくり」『月刊地域づくり』302
- 神戸市住宅都市局計画部まち再生推進課編 2015『新在家—まちづくりの葉—』
- 神戸商業大学 1939『1939年学部8回生卒業アルバム』
- 神戸大学大学院人文学研究科・文学部地理学教室 2015『展示会「歴史地震(貞観地震)に学ぶ津波の実態」資料集』
- 澤井祐紀 2014「教育・普及活動のための津波堆積物のはぎ取り標本」『地質ニュース』3-2
- 澤井祐紀ほか 2006「仙台平野の堆積物に記録された歴史時代の巨大津波」『地質ニュース』624
- 塩崎賢明 2009『住宅復興とコミュニティ』日本経済評論社
- 宍倉正典 2011「津波堆積物からみた 869年貞観地震と 2011年東北地方太平洋沖地震について：研究報告 2011年東北地方太平洋沖地震 第2回津波」『日本地震学会ニュースレター』23-3
- 田辺玲子 2013『外国人居留地と神戸』神戸新聞総合出版センター
- 谷端 郷 2009「1938年阪神大水害における被災社寺の空間的特徴」『歴史都市防災論文集』
- 長尾 武 2008「1854年安政南海地震津波，大阪への伝播時間と津波遡上高」『歴史地震』23
- 長谷川孝治 2006「神戸」『地図で読む百年 近畿Ⅱ』古今書院
- 阪神大震災復興・市民まちづくり支援ネットワーク事務局編 1995「新在家南地区復興まち・すまいづくりの実践報告その1」・1997「新在家まちづくり委員会」の紹介『きんもくせい』12,50
- 兵庫県，(財)21世紀ひょうご創造協会 1995『阪神・淡路大震災復興誌』1
- 兵庫県治山林道協会 1998『六甲山災害史』
- 文貞實 1999「被災コミュニティと在日韓国・朝鮮人の復興戦略」『阪神・淡路大震災の社会学3 復興・防災まちづくりの社会学』昭和堂
- 松本あきら 2009「心の豊かさ 右肩上がりのまちづくり—真壁」『ぶざんレポート』121
- 森栗茂一 1996「神戸アジアタウンと長田のまちづくり」『兵庫地理』
- 山本俊貞 2006「神戸旧居留地の景観形成」『都市問題研究』58-3
- 山本俊一郎 2002「神戸ケミカルシューズ産地におけるエスニシティの態様」『季刊地理学』54
- 和木友絵 2014「ネットワークからみたボランティア団体に関する地理学的考察」第62回全国地理学専攻学生卒業論文発表大会，東京学芸大学

協力（順不同，敬称略）

茨城大学，神戸大学海事博物館，人文学研究科地域連携センター，附属図書館震災文庫，山口誓子・波津女俳句俳諧文庫，文書史料室，海事博物館特別専門員，野邑恵理子，西崎美佳，米田恵子，浅野瑞生，和木友絵，西喜多 望，北川和真，小川稜人，松田有紗子，船本秀忠，鈴木崇由

補 注：本企画展の一部は，2014-2015年度の神戸大学「地理学演習Ⅰ」「景観文化財学」，「地図史演習」授業の一環として，学生が自ら調査・作成しました。若干不足もあるかと存じますが，学生の学びの過程としてご理解頂きたく存じます。担当(楠野優子，曲芸，八太颯介，上田咲季，近藤れい，張 超越，中島芽理，和泉 亮，松浦 翼，島田彬宏，大角真名人，小嶋悠希江，田村 豪，納谷真人，長谷川恵子，藤井達也，水島雅仁，山下真菜美，小田孝広)

本目録は，神戸大学サテライト巡回展 2015「災害と文化財保存の歴史地理」(会期 2016.2.1～3.28)の出品資料等を記載した。(編集:菊地)

発行:2016年2月1日 神戸大学人文学研究科・文学部地理学教室